

12 章 オープンガーデン

／ようこそ私の庭へ

1－1 郊外住宅の孤独

1－2 庭付き一戸建ての計画学

1－3 三田グリーンネットの試み

1－4 再生へ／＜住み開き＞は庭から



「8章ディテールがつくる街」では、老弱アーティストがそれぞれの感性とDIY技術を持ち寄って老朽空き家を＜住み開き*¹＞を前提に再生する、尾道坂の町の事例を紹介した。そして本章は、(意外にも) 空き家の増加に不安を抱く郊外住宅団地住民による、庭付き一戸建て住宅の住み開きのレポートである。オープンガーデン—趣味のガーデニングを公開して一戸建ての魅力を新しい住宅需要家に再認識してもらう試み。立派過ぎて美しすぎて、注ぎ込まれた労力に若い人の腰が引けるのではないかと心配になるほど、私的領域を公共福祉に提供するパターン「2章玄関先のベンチ」に続く、貴重な事例のレポートである。

＊1. 住み開き (Wikipedia)

住居や個人事務所などプライベートな空間を、本来の用途や機能を保ちながら、一部を限定的に開放することによって、セミパブリック化させる活動や運動、そのような使われ方をする拠点のこと。自宅で子どもが独立してできた空き部屋や、事務所の空間、改築によってできたスペースをカフェやギャラリーとして、近隣の人たちにスペースを開放する。アイデアで色々な用途に使用でき、新しいコミュニケーションの場として広がりを見せている。2009年頃、「日常編集家」のアサダワタルによって提唱された。2012年1月には関連書籍も出版された。

1-1 郊外住宅の孤独

筆者らは「8章ディテールがつくる街」において、空き家再生事業自体をテーマパーク化して、インテリ系観光客が落とす金を財源にしてしまおうという＜明るい事例＞を取り上げた。尾道坂の町を最初に訪問した10数年前には迂闊にも、老朽空き家群を戦災を免れた歴史都市という特殊ケースとして眺めた。しかし、空き家問題はとつくに身近に忍び寄っていたのである。平成25年(2013年)の住宅統計*²によると、空き家率は全国平均で13.5%にも達するという。廃村が危ぶまれる過疎地のニュースをよく耳にするので、あーそうかとも思うが、過疎地は元々人口が少ない。統計に表れた空き家の大半は、高度経済成長期に都市部に流入した巨大人口の受け皿として競って開発された、都市近郊住宅団地において発生しているのである。

NHKのネットニュース「郊外住宅の见えない空き家」(2014年の調査データが使用されている)では、昭和40年代に開発された横浜市南部の郊外住宅地(青葉地区か)にカメラが入ってレポートしている。少し歩いただけで雨戸を締め切った空き家が目に入る。調査地区1500戸のうち50戸が空き家であるという。元企業戦士の住民も今

や 70 代、町内では交友も減り、ホームに入るか今の家を売って下の町に小さなマンションを買うか、思案の毎日とインタビューに答えている。

筆者の学生当時、住宅の設計課題（例えば二級建築士試験の製図試験）は決まって「都市近郊に建つ庭付き一戸建て住宅」であった。小さいながら幼児が遊べる庭を備え、少し成長すると公園デビュー、ピカピカの小学校とショッピングセンター等々、理想的な子育て環境と快適な団地ライフが待っており、筆者が住み方調査に出向いたときも、専業主婦の丁寧な応対を受けた。このような一種ユートピア的な生活はいつまでも続かないと、誰が気づいていただろうか。レポートは「もっと若い人に移り住んでもらって、かつての活気を取り戻したい」と結ばれている。

* 2. 住宅統計

総務省統計局の住宅統計調査。統計項目には郊外戸建て住宅の項目は無いので、総住宅数の増減率で住宅建設の動向を概略把握してみると、1963~1968（昭和 38~43）間には 21.3%増、1968~1973（昭和 43~48）間には 26.8%もあった数字がその後は減少一途、直近の 2008~2013（平成 20~25）間では 5.3%に留まっている。都市部と周辺のマンション建設が、この数字のすべてではないか。

1 - 2 庭付き一戸建ての計画学

広島市の周辺地域では、古アパートが取り壊された後に数戸の独立住宅が建つ小規模開発がよく見られるが、これらは「戸建て」ではあっても「庭付き」ではない。規模は決まって 100 m²敷地に 100 m²延床、建蔽率を 60%とすると空地は 40%、空地は四周に必要な庭に割り当てられる面積は 20%、面積にすると 20 m²、一台当たりの駐車スペースを 10 m²とすると、クルマを二台駐めると木は一本も植えられなくなる。だからこれらの住宅は「一戸建て」ではあっても「庭付き」ではない。

このように試算してみれば、かつて郊外を埋め尽くした「庭付き一戸建て」の規模はある程度推察できる。150 m²の敷地広さがあれば庭の広さ（20%）は 30 m²、当時のクルマ事情は一家に一台だったから 10 m²を引くと 20 m²（4m×5m あるいは 3m×7m）の庭が残る。200 m²の敷地なら空地率はもっと上がって美庭が残るはずであるが、そのような敷地は建売業者に買い占められて、分割分譲されてしまうことが多かった。住宅規模には地域差があるが、庭付き一戸建ての敷地面積は概略 150 m²（45 坪）、延床面積は 130 m²（40 坪二階建て）程度であったと推察される。

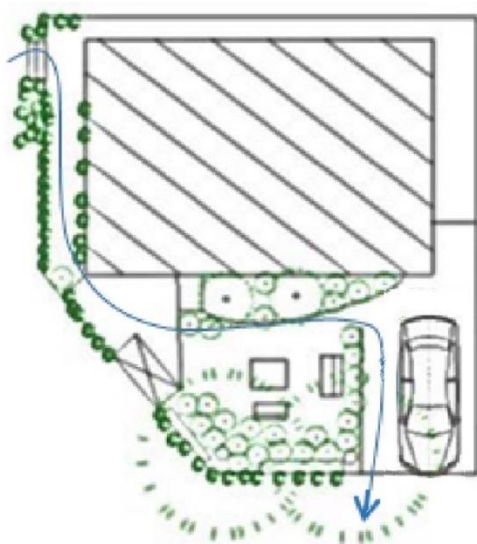
さて、「庭」は住まいの中でどのように機能していたのであろうか。庭は普通、座敷

とそれに続く居間（リビング）に面していたから、庭の機能は＜接客（もてなし）＞と＜だんらん＞であったに違いない。庭は玄関と違って敷居が低く、遠慮のいらぬ友人、隣人の出入り口でもあった。ガーデニングか作庭か言い方はともかく、丹精した庭は誰かに見てもらいたいものである。紫陽花などが色づけば、客を呼ぶ口実になったに違いない。だからことさら空き家問題と結びつけなくても、庭が開かれる動機、雰囲気はあったといえる。そして今、庭開き・オープンガーデンの先鞭者として取り上げるのは、2000年に三田市で発祥し、神戸市北区等周辺の住宅地域に活動の輪を広げつつある「三田グリーンネット・オープンガーデン」である。

1-3 三田グリーンネットの試み

2000年にスタートした兵庫県の「三田グリーンネットオープンガーデン」は全国から見学者が訪れるガーデニングの＜聖地＞である。その庭主である居住者たちに会いに三田市へ訪れること6回。木々と花々に囲まれているはずの庭からは、花の香りよりも居住者たちの気配を強く感じる。居住者たちはそこに住み始めてからずっと自分流の庭づくりを工夫し、試し、やり直し、今風の言い方をすればPDCA（Plan、Do、Check、Act）を繰り返して、個性的な居住空間へと造り上げているのである。

実例としてY庭を紹介しよう。前庭が南面する角地、クルマの大きさから言って延床100㎡程度の小邸であるが、隅が大きく切り取られる敷地形状から建ぺい率は低目、庭



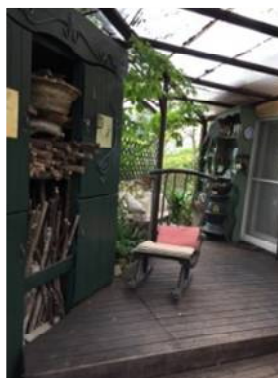
面積の比率は高い。普通、南側に玄関を設けるとプランに無駄が生じるが、幸い角地なので、玄関は北西端に設けられ、庭に回る通路（アプローチ）もガーデニングを施す余裕を持って確保されている。また駐車場も庭の一部を成し、つまりは表の道路へと回廊的に通り抜けが可能である（図中矢印で示す）。字句通りパーキングである。



玄関から庭を見る

パーキング

玄関側から庭の方へ 20 歩ほど進むと、四畳半くらいの「ステージ」が現れる。住まいの反対側には手作りの収納棚が設けられ、これを使って半透明なプラスチック屋根が張り渡されている。収納棚のオープン棚には薪が入れられ、扉で隠された部分には庭の手入れ用の道具が入り、扉の上には異形鉄筋を使った手作りの飾りが施されている。その横には木の格子ラティスを半円に切り込みタイルをはめ込んだ柵が設置され、その前に手作りのデッキチェアが鎮座している。



デッキチェアの正面にある居室の鎧戸は、オープン棚によってきれいに隠されている。半透明な天井の端には、地面まで届くビニールカーテンが取り付けられていたそうで、今でもカーテンフックがさびたまま残っている。

「ステージ」を超えると、地面に大小の四角い石が埋め込まれ、手作りのテーブルとイスがしつらえられた最終目的の庭。団らんともてなしの空間に到達する。頭上の大きな樺が日光を遮り、葉が風の音を奏でる。丸い敷き石に導かれて木製のアーチをくぐり駐車場に入ると、天井からは葡萄蔓が垂れ下がり、側面の井桁格子にはステンドグラスが取り付けられ、駐車場にしてはおしゃれである。なお、駐車場もステージと同様に、プラスチック屋根で覆われている。

ここの庭の主は70代のご夫婦である。庭は2人の創作の場であり、憩いの場であり、オープンガーデンの機会を得て創作発表の場、そしておもてなしの場となる。



オープンガーデンに参加している庭主に聞くと、庭は居住者のライフステージに合わせて造り替えられてきているという。家を購入し、子供が生まれた時には庭を走り回れるよう芝生にし、子供が少し大きくなると一緒に花壇をつくりチューリップを植える。子供が成長し花壇以外に興味を持つようになると、母は野菜やハーブを植え、本格的にガーデニングに力を入れ始める。父が退職し時間ができると、母は父に庭のパーゴラやベンチなどを発注するようになり、夫婦のコミュニケーションは庭を通して活発化していく。そしてだんだん歳をとっていくと、手入れの楽な常緑樹などに植え替え、家の中から庭を見ることが多くなる。

オープンガーデンに参加することによって同じ「三田グリーンネット」のメンバーや見学に来た人と交流することができ、褒めてもらうために日々頭と体を使う。庭は居住者によって磨かれる、宝石のような空間なのかもしれない。

1-4 再生へ／＜住み開き＞は庭から

ホームページで公開されている三田グリーンネットの概要を以下に記す。正式の設立

は2000年11月25日の設立総会からということであるが、きっかけはその年の5月に開かれた〈第3回三田まちなみガーデンショー〉に合わせた4庭の公開であったという。三田市で始まったオープンガーデンの活動はすぐに神戸市北区、西宮市北部など自治体を越えた周辺の近郊住宅団地に広まり、美観活動のモデル手法として全国的に認知されるまでになった。ホームページには各年の活動が美しくまとめられているので、ガーデニングの入門ガイドとしても広く活用されているに違いない。公と私の仲立ちとして、ここでもインターネットの力が活かされている。

さて、オープンガーデンはどのようなタイプの〈都市のインテリア〉なのか。Y庭がそうであったように、郊外住宅団地は丘陵地なので敷地は道路より高い位置に設けられ、前庭であっても低い生垣や花壇によって容易にプライバシーは保たれる。うっかり植えた樺が街路樹のように道路にはみ出で大きく育ったとしても、クルマの通行に支障はない。だから郊外の庭は戸外空間・エクステリアであっても、インテリア感も十分に醸成されるのである。公共庭として公開された場合、このレポートの例えば「玄関先のベンチ」のように難しい解釈を加えなくとも、これらの庭はごく普通に〈都市のインテリア〉であると理解されるに相違ない。

ところで尾道坂の町の訪問以来、都市のインテリアの副題の感がある空き家再生は、三田オープンガーデンのモットーには書かれていない。ガーデニングの明るいイメージが損なわれるし、これらの団地はまだ切羽詰まった課題ではないのであろう。しかしどこかの団地で空き家再生の手段として〈住み開き〉が取り上げられる場合、まずはオープンガーデンから一となるに相違ない。